豆棚閒話の作者王夢吉

古勝正義

はじめに

清初の短篇集『豆棚閒話』は、その特異な作風と独特な構成によって知られる。

作者は「聖水艾衲居士」を名のっている。この艾衲居士とは誰なのかについては結論が出ていない。しかし、パトリック・ハナン氏が「作者は王夢吉か、少なくともその友人」と言ったとき、同氏は作者特定のすぐ手前まできていたのである(注1)。ハナン氏があげた王夢吉とは『麴頭陀傳』別名『濟公全傳』の作者である。

『豆棚閒話』の作者については、従来、三つの説がなされている。一に范希哲とするもの、二に董若雨とするもの、三に「王夢吉か、少なくともその友人」とするものである。このうち范希哲説と董若雨説は取り立てて論ずるに値しない。これについては徐志平氏が『清初前期話本小説之研究』に手際よく整理しているので、そちらにゆずる(注2)。重要なのはハナン氏の「王夢吉か、少なくともその友人」とする説である。ハナン氏は、『豆棚閒話』の作者は王夢吉かも知れず、少なくともその友人であると主張して、次のような事実をあげている。まず、北京圖書館蔵『濟顛全傳』残本(鄭振鐸旧蔵)の作者香嬰居士は、印から王夢吉とわかる。挿図に署名入りの詩句が配されていて、署名の多くは明らかに王夢吉自身のものであるが、そのなかに「艾衲居士」というのがある。次に、『濟顛全傳』の評者は嘉興の紫髯道人であり、『豆棚閒話』の評者は同じく嘉興の紫髯狂客である。また、『濟顛全傳』の序文において、王夢吉は西湖を「聖湖」と称し、『豆棚閒話』では艾衲居士の郷里を「聖水」と称している。さらに、『豆棚閒話』は分回に「則」という語を使用しているが、『濟顛全傳』も同様である。

このハナン氏の説は相当の説得力をもっているが、『豆棚閒話』の作者問題がこれで決着を見たわけではない。

『麴頭陀傳』の作者香嬰居士を最初に王夢吉と結びつけたのは孫楷第氏であろう。すなわち同氏は『大連圖書館所見小説書目』(『日本東京所見小説書目』所収)の『濟公全傳三十六則』の項において、同書巻首の序に「康熙戊申竹醉日香嬰居士題於西湖禪近齋中」と署し、「香嬰居士」「王夢吉印」「長齡」(齢長が正しい—古勝)の印が使用されていることから、「おそらくこれが編者の名字であろう」と記した。孫氏は『中國通俗小説書目』(人民文學出版社、一九八二)においては、同書について「清・王夢吉撰」と断定したが、字については、ここでも「長齡」と誤り、「夢吉字長齡、杭州人」としている(注3)。

これまでのところ、王夢吉については、『麴頭陀傳』の作者と認められ、かつ『豆棚閒話』の作者かと疑う見解が出されているわけであるが、『豆棚閒話』の作者として特定されたとは言えず、その経歴や事跡についても、杭州の人という以外、全く明らかにされていない。

中国ではすでに失われ日本に残っている実用医書の一つが、『豆棚閒話』の作者問題に解答をあたえる。内閣文庫に収蔵されている『行笈驗方』八巻がそれである。王夢吉が作ったこの書物は『豆棚閒話』の作者艾納居士の人物特定の決め手となるのみならず、伝記資料の断片すら発掘されていない王夢吉の生涯について、若干の伝記事実を提供している。王夢吉が廣寧失陥の当事者として責任を問われて刑死した遼東巡撫王化貞の身辺にあったという事実は、まず何よりも『豆棚閒話』や『麴頭陀傳』という作品の読み方に重要な指標をあたえるであろう。

一

王夢吉の『行笈驗方』は中国ではすでに失われており、『中國醫籍通考』第三巻(上海中醫學院出版社、一九九一)はこれを佚書として著録し、丹波元胤の『醫籍考』から王夢吉の「傳因」を採って載せている。

日本では佐伯毛利家旧蔵本(首巻第一葉に「佐伯侯毛利高標字培松藏書畫之印」の印記をもつ)が伝存し、内閣文庫に蔵せられる。ほかに、『舶載書目』には宝永四年丁亥(康熙四十六年、一七〇七)に舶載された本が著録されている。『舶載書目』の記載には若干の混乱があり、著録されている本も康熙(二十四年)乙丑の序をもつ重刻本で、原刻本ではない。

内閣文庫蔵『行笈驗方』から、ここでの問題に関連する書誌情報を取り出すと、次のとおりである。巻首に「質言」(行笈驗方質言)、「傳因」(行笈驗方傳因)、「凡例」(生儀堂行笈驗方凡例)、「目録」(王肖乾先生行笈驗方目録)をもつ。「質言」には「康熙己酉七夕虎林聖水艾衲弟子王夢吉齋心百頓拜」と署し、「艾納」「王夢吉印」「齡長氏」の三顆の印影を刻する。康熙己酉は康熙八年(一六六九)である。「傳因」には「虎林王夢吉齡長氏再識」と署す。「凡例」は十三条からなり、「王夢吉齡長氏又識」と署す。

本文巻端は次のとおりである(巻二以下は首行を省略)。

巻一「王肖乾先生行笈驗方巻之一」
　「虎林後學(呉嗣昌懋先父裁定／王夢吉齡長父授梓)／塩官沈　泰彙征父校鐫」
巻二「虎林後學(呉嗣昌懋先父裁定／王夢吉齡長父授梓)／次男永譽集生父校」
巻三、四は巻端なし。
巻五「虎林後學(呉嗣昌懋先父裁定／王夢吉齡長父授梓)／弟王　濛沚蘂父校訂」
巻六は巻端なし。
巻七「錢塘後學(呉嗣昌懋先父裁定／王夢吉齡長父授梓)」
巻八「虎林後學(呉嗣昌懋先父裁定／王夢吉齡長父授梓)／姪應宸道含父校」

これを『豆棚閒話』および『麴頭陀傳』の、すでに知られている書誌情報と照らし合わせると、次の三点を指摘することができる。第一に、『行笈驗方』本文の巻端に「王夢吉齢長父」の文字が見え、『麴頭陀傳』の香嬰居士の「小引」に「王夢吉印」「齢長」の印を用いている。また『豆棚閒話』図版第二葉の裏に「儒長」の印を使用している。第二に、『行笈驗方』「質言」の王夢吉が「虎林聖水艾納」と称し、『豆棚閒話』の本文巻端に「聖水艾納居士」とある。第三に、『麴頭陀傳』図版第五幅の「艾納居士」が「艾納」の印を用い、『行笈驗方』「質言」の王夢吉が同じく「艾納」の印を用いている。

これらの点から、『麴頭陀傳』の「香嬰居士」と『豆棚閒話』の「艾納居士」が、ともに王夢吉の用いた号であること、したがって『麴頭陀傳』の作者と『豆棚閒話』の作者は王夢吉という同一人物であること、王夢吉の字が「齢長」であること、王夢吉が杭州の人であることが分かる。また『行笈驗方』巻七の巻端に「錢塘後學」とあることによって、王夢吉が錢塘縣の人であることが分かる。『豆棚閒話』の作者は杭州府錢塘縣の人王夢吉と確定し、「その友人」の可能性はない。

「艾納」は薬用植物の一種、「香嬰」は香料の一種という。ともに医薬にたずさわる人間の号にふさわしい文字と言えよう。『麴頭陀傳』図版に見える「古嘯生」(第二幅)、「好古漁人」(第三幅)、「見獵道者」(第十幅)は、すべて王夢吉の戯号と見なしてよい。

二

『行笈驗方』は薬方を集めた実用医書で、王化貞からあたえられた『普門醫品』をもとにしているが、それは王夢吉が王化貞の門下にあった、つまりその門客であったことに由来する。

王夢吉が門客として仕えた王化貞は明末の遼東問題を担った高官の一人である。勃興してきた後金との抗争において前線の都市となった廣寧の防衛に失敗して長らく獄中にあり、混乱する時局のなかで棄市された。『明史』に独立した伝は立てられていない。まがりなりにもまとまった伝記資料と言えるのは、傅國による「墓誌銘」があるのみで、鄧之誠が傅國の文集の残本のなかに発見して『骨董瑣記』(三記巻二)に載せている。

王化貞、字は元起である。肖乾と号した。山東・諸城の人。万暦元年(一五七三)に生まれた(傅國「墓誌銘」)。万暦二十五年挙人。万暦四十一年進士、戸部主事を授けられた。寧前道右参議から右僉都御史。遼東巡撫として廣寧を守ったが、守関を主張する經略熊廷弼に対して主戦を主張し、熊との間に確執を生じた。いわゆる「經撫不和」である。天啓二年(一六二二)正月、腹心の将である孫得功の寝返りによって廣寧を失い、王化貞は従卒二人とともに命からがら逃れた。責任を問われて、熊廷弼とともに獄に下された。

經撫不和に対して、朝廷の大勢は王化貞支持に傾いていた。首輔葉向高は東林の首魁であるが、王化貞の座主であった関係で王化貞を支持した(注4)。また、宦官魏忠賢とつながりがあり、もともと熊廷弼と相容れなかった兵部尚書張鶴鳴は王化貞の側に立った。こうした背後勢力の関係から、熊廷弼と王化貞に対する処断が分かれたという。魏忠賢や多くの朝臣から憎まれていた熊廷弼が早く天啓五年(一六二五)八月に処刑されたのに対して、王化貞は崇禎五年(一六三二)まで獄中にながらえた。

王化貞自身が閹党につながっていたとも言われている。潘檉章は次のように詠む。「可憐兩大帥、不戰而自還。一帥倚中人、一帥無所恃」(注5)。「中人」とは宦官。すなわち、王化貞は閹党につながっていたために処刑をまぬかれていた、というのである。

王化貞が獄中にあった間、助命運動がさかんに行われた。張應時らがその功をたたえる上疏をして、身替わりに死ぬことを願い出るということもあった(『明史』巻二五八・熊開元傳)。また、遼東の士民柏之煥らが王化貞のために闕に伏して冤状を訟えた(傅國「墓誌銘」)。時を同じくして獄中にあった高出(孩之)の『拘幽集』には王化貞と応酬した数首の詩を載せるが、そのうち「王中丞初度歌」は天啓五年十月六日、王化貞五十三歳の誕生日を祝う作で、その籍没を痛嘆する人びと

を詠んでいる(注6)。天啓六年二月には、毛文龍が王化貞の釈放を請願する疏をたてまつった。助命運動は自然発生的なものもあったかも知れないが、王化貞が自分の免罪、釈放を各方面にはたらきかけた結果でもあったようである。王化貞は天啓二年に毛文龍に書簡を送って救助に力をかしてほしいと依頼している(注7)。天啓六年の請願もそれに応えたものであったにちがいない。王化貞はそのような画策に使える巨大な資産をもっていたと言われる。熊開元の疏には次のように云う。「化貞は巨万の資産をもち、朝審になるたびに燕市の少年を買収し、路傍に立って熊廷弼に瓦礫を投げさせ、化貞のことを嗟嘆させ、これによって上聞を惑わした」。

瞿式耜の上疏に「のうのうと獄中で過ごし」(逍遙福堂)とあるように(計六奇『明季北略』巻四)、崇禎五年に情勢が悪化するまでは、囚われの身とはいっても、比較的安穏な生活であったと思われる。廷臣および宦官との関係からしても、獄中の処遇は通常とは異なるものがあったはずである。

しかし、崇禎四、五年にいたって情況が変わった。崇禎四年の終わりから崇禎五年にかけて、毛文龍の旧将であった登州遊撃孔有徳らが乱を起こし、登州を陥れ萊州を囲んだ。また陝西、山西では流賊の活動が日増しに激化した。崇禎五年六月、兵部職方員外郎華允誠がたてまつった「三大可惜、四大可憂」の疏は、王化貞の処刑をもとめた。「師を喪い国を誤った王化貞に対する刑が楊鎬(熊廷弼の前任の經略)と異なるのはどうしたことか」(『明史』巻二五八、『山書』巻五ほか)。こうした背景のもと、朝廷は王化貞に対する刑を執行せざるを得なかった(傅國「墓誌銘」)。

王化貞の著としては『痘疹秘方』『産鑑應急驗方』『普門醫品』が知られる。そのうち、『痘疹秘方』は伝わらない。『産鑑』三巻は万暦四十六年(一六一八)の序をもつ本が内閣文庫に蔵せられる。

『普門醫品』は崇禎元年の「自序」をもつ四十八巻本が原刻本で、北京圖書館(現、中國國家圖書館)などに蔵せられる。清代では康熙三十三年刻本があって、これは内閣文庫にも蔵する。『四庫提要』の著録は、康熙刻本によっているようである。原本は二百余巻、六百余張、約十五万字の大部の書物だったと、王夢吉は書いているが(『行笈驗方』「質言」)、二百余巻というのは解せない。

王化貞が『普門醫品』「自序」に記すところによれば、彼は若いころから「軒岐家」(医薬家)の言に親しんだ。王夢吉は小説家らしく、王化貞は二十歳過ぎたころ結核を病みあやうく一命をうしなうところであったが、たまたま出会った一人の道士から医方を授けられ、これによって病気がなおったという話を書いている(『行笈驗方』「質言」)。王化貞はこれにいたく感じ、のちに官界に入ってからの十年、つねに施済につとめたという。

『普門醫品』の「自序」は崇禎元年の冬至の日に獄中で書かれているが(注8)、書物の制作自体が獄中でなされた。王化貞は下獄してからは暇にまかせて方書を抄録していた。そんな時、高出(孩之)から『本草綱目』を入手し、そのなかの善方を抜き書きして集めた。これを見て成書を勧めたのが胡吉甫(名待考)であったという。完成した原稿は門人の陳斌(憲卿)が整理編集した。『普門醫品』本文巻二にも「東武王化貞元起父編輯／門人陳斌憲卿父輯閲」の文字が見える。書物の完成に力があったという三人のうち、高出は、字を孩之といい、やはり遼事を担った官僚である。山東・萊陽の人。万暦二十六年(一五九八)進士。天啓元年、西平堡監軍であったときに遼陽が陥落し、遁走した。翌二年正月、廣寧失陥の際に熊廷弼に随って山海關に逃げもどり(『明季北略』巻二)、二月、逮えられて下獄した(『國榷』巻八十五)。『鏡山菴集』二十五巻があり、その最後の五巻は、獄中の作を集めた『拘幽集』にあてられている。『拘幽集』に収めるのは崇禎二年までの作であるから、この年に生涯を終えたものと思われる。ともに獄中にあって、王化貞と高出は親交があった。先に触れたように、『拘幽集』には王化貞と応酬した数首の詩を収める。

三

ここで、王夢吉の生存年代、北京滞在、遊歴、生業などについて見てみる。

と言っても、生没年を明記した資料は見つからないので、要するに生没年未詳である。やむなく『豆棚閒話』『麴頭陀傳』および『行笈驗方』によって、出生の大まかな年代を推定してみるしかない。

王夢吉は『行笈驗方』「傳因」に、五十歳ちかくまで子がなかったが、つづく十余年にたてつづけに三子を挙げたと言っている。つまり五十代になってはじめて第一子をもうけたわけである。三子のうち、次男王永譽(集生)が『行笈驗方』巻二の校者として名前を出している。この時、永譽は少なくとも二十歳にはなっていたはずである。王夢吉が五十代の時に生まれた次男が康熙八年(一六六九)にすでに成人していたと考えられるから、著者は少なくとも七十歳代にはなっていたと考えなければならない。

王夢吉は『豆棚閒話』において「艾衲」「艾衲先生」「艾衲道人」「艾衲老人」(第八則回末總評)などと呼ばれている。「艾衲老人」と呼ばれているのは、それにふさわしい年齢になっていたと見なすのが順当で、つまり執筆のころは老年期に入っていたと思われる。

手がかりになりそうなのは『麴頭陀傳』の莫山人である。第二十七則に登場し最終回の第三十六則に再度登場する莫山人は、作中人物として従来の濟顛物語に対して内容および編成の面から批評を加えていて、逸話の羅列にとどまる出来合いの濟顛伝説を長篇小説として構造化しようとする作者の抱負を表している。濟顛の入寂後を語る最終回では、莫山人が濟顛の伝記資料を集めて行状記(行述)を作り、史官に提出したと語られている。作者の最も直接的な分身と考えてよい。この人物の年齢は七十余歳としてあって、これは作品執筆時の作者の年齢を示しているかも知れない。この「七十余歳」をよりどころに、『麴頭陀傳』刊行時(康熙七年、一六六八)の年齢を七十三歳と仮定した場合は万暦二十四年(一五九六)の生まれ、七十五歳と仮定した場合は万暦二十二年(一五九四)の生まれということになる。『豆棚閒話』の内容からしても、ハナン氏が説くように、一六三〇年代、四〇年代の動乱を自ら経験した世代であることは疑いない。

決め手を欠くが、ほぼ万暦二十年代前半の生まれと見当をつけておいて、大きな誤差はないであろう。

次に、北京滞在について。王夢吉が北京の王化貞の門下にあったのは、王化貞が廣寧失陥の責任を問われて下獄した天啓二年から、刑死した崇禎五年までの間の一定期間であると推測される。王化貞が王夢吉に言った言葉に「ながらく門下にあって力をかしてくれた」(及門周旋久)とあるから(『行笈驗方』「傳因」)、一年とか二年とかではないであろう。仮に王化貞の下獄前にすでにその門客になっていたとすれば、遼東で生活した経験をもった可能性もあるが、証拠はない。王化貞の門客であった王夢吉が、王化貞にどのように力をかしたのか、これも不明である。ただ、上記の助命運動に関わるような仕事について、何もしなかったとは考えられない。「周旋」には当然そのような仕事が含まれたであろう。『行笈驗方』「凡例」に「本師(王化貞のこと)は捨薬すること二十余年」と言っているが、「二十余年」とは「歴宦十年」に、下獄から刑死までの十一年間を加えた年数に相違ない。王夢吉は王化貞刑死の年までのことについて言及しているわけで、崇禎五年頃までは北京にいたと考えられる。

王夢吉は王化貞の身辺にあって力をつくし、医書をあたえられて、おそらく王化貞が刑死した崇禎五年前後に北京を離れた。その後、山西、陝西、湖北、湖南(秦晉鄂楚)の各地を旅したという(『行笈驗方』「傳因」)。河北から山西に入り、黄河をわたって陝西へ、さらに陝西から湖北に出るという旅程であったか。あるいは『豆棚閒話』第十一則の第一話の旅人のように、陝西からは河南を経て湖北に出るという旅であったかも知れない。この間の本業が何であったかは不明である。引きつづき誰かの門客であったとは考えにくい。というのは、彼自身、「旅舎で病気になったときに(この処方を)試みるとたちどころに平癒し、人からも治療をもとめられた」(逆旅遭疾、毎試立愈、人亦向余索治)と書いているからである(「傳因」)。採薬・売薬をしながら各地を歩きまわっていたというのが最も想像しやすい。仲間とともに薬材を仕入れて山東に売りに出かけた経験をもつ『豆棚閒話』第一則の語り手や、湖廣・徳安府の山寺で異様な「坐化」を目撃する第六則の薬草採りの医者(採薬醫人)に、この遊歴の体験が投影されているかも知れない。

王夢吉の遊歴が上記の地方に限られたものであったということはあり得ない。江南から北京に上るには通常大運河沿

いの旅程をとったから、杭州の王夢吉に北京居住の時期があったということは、とりもなおさず現在の蘇北、山東を旅行した経験をもつことを意味する。

おそらく明清交替の直前のころであろう。王夢吉は五十に手がとどく年齢になっていたが、まだ男子がなかった。そこで薬王に願をかけて三万度の施薬を誓った。つづく十余年のうちに、一万に達したところで相継いで三人の子を挙げた。施薬というが、これも事実上は売薬であったと思われる。康熙八年に『行笈驗方』を刊行したのは、家計が思わしくないうえに薬材の高騰も加わって施薬がつづけられなくなったために、その替わりに秘方を公開したものであると、自ら書いている(「傳因」)。

かたわら『豆棚閒話』『麴頭陀傳』などの通俗小説を創作、刊行した(注9)。その文筆活動はそこにとどまらず、詩および伝奇にも及んだという。紫髯狂客は、「艾衲は遍く海内に遊び、名山大川に毎々留詩刻記して、その奇を詠嘆した」と書き(第十則回末總評)、また「胸に万巻を蔵し、口は懸河のごとく、筆を下しては休まず、義を拈じてはすなわち透り、およそ詩集、伝奇の剞劂して天下に膾炙するもの、また数しれない」とも書いている(第十二則回末總評)。王夢吉自身が『行笈驗方』において、秦晉郢楚の各地を遊歴する生活を送ったと書いているので、少なくとも「遍く海内に遊び」という部分には一応の裏付けがあると言える。ただ、王夢吉が詩集や伝奇をもつ文人であったかどうかという点については疑問がのこる。現在のところ、その詩集、伝奇については伝存も著録も確かめられず、その名が江南の文人社会に知られていた様子もない。

しかし、医家としては、その交遊圏に名の知られた人物もいないではなかった。『行笈驗方』の「裁定」にあたっている呉嗣昌は、その一人である。呉嗣昌、字は懋先。杭州府仁和の人で、代々医を業とした。鼎革の初め疫病が大流行したとき、生命を救った者多数に及んだという。順治十八年から浙江總督であった趙廷臣(君鄰)が重病にかかったとき、衆論を排して氷水を投じたところたちまち蘇生したので、趙廷臣は彼を神のごとく敬ったという。弟子に宋爾班、潘錫祉がいる。『傷

寒正宗』『醫學慧業』等が世に行われた(康熙『仁和縣志』巻二十一、『浙江通志』巻一九六)。

『豆棚閒話』の作者について、従来繰り返されてきた一つの見方がある。すなわち、鄭振鐸「明清二代的平話集」(『中國文學研究』上)以来の、作者を「明の遺民」と見なす見方である。しかしながら、王夢吉が遺民と言えるかどうかは大いに疑問である。

読書人の範囲を厳密に考えて生員身分をもつことを要件の一つとするなら、彼を読書人と決めてかかるわけにもいかないが、広い意味でなら、確かに読書人のうちに入る。それでは、彼は王朝交替後、新朝に背を向けて生きる遺民であったのだろうか。「医に隠れる」という言い方があるように、医業、売薬は読書人の隠逸の一つの手段ともなる。清初の遺民のなかには、医業や売薬で生計をたてる人もめずらしくなかったが、その場合は文字通り「医に隠れた」のである。

王夢吉の場合、同時代の「医に隠れた」遺民たちと同一視できるかどうか。張道勤氏が、『豆棚閒話』「叙」のなかの「肚いっぱいの〈詩に云う子曰く〉は売れず」のくだりと「燕苓や雞壅を薬嚢につめ、嘻笑怒罵を化して文章とした」のくだりから、作者は民間で医業によって生計をたてながら、一方で詩文小説の創作に従事したとするのは(注10)、かなり正確な推定である。しかし、そのことと、作者が明の遺民であったかどうかは、おのずから別問題である。「肚いっぱいの〈詩に云う子曰く〉は売れず」、「燕苓や雞壅を薬嚢につめ」云々とあるのは、確かに読書人の本分をすてて医薬に従事したという意味であるにしても、それを王朝交替にともなった方向転換と考えるべき根拠はない。王夢吉が医薬と関わりをもつようになったのは明末からのことであって、王朝交替後ではない。本来期待されている生き方をすてて一種の自由業に生きる道を選ぶ多くの読書人の存在は、明末に見られた顕著な現象である。いわゆる「山人」現象である。王夢吉の生き方はむしろ山人にちかい。

四

そこで、王夢吉の閲歴との関係から『豆棚閒話』を検討してみる。

まず、物語の舞台について。物語の舞台が中国の広範囲に散らばっているのは、『豆棚閒話』の一つの特色でもある。第九則「漁陽道劉健兒試馬」の主人公は河北(北直隷)を大きく移動し、それにつれて舞台が移っていく。永平府遷安縣、順天府遵化縣、順天府薊州、順天府三河縣邦均店、保定府、眞定府柏鄉縣、順德府などがその舞台となっている。

河北以外では、次のような土地が物語の舞台となり、あるいは言及されている。山東では濟南府章丘縣(第一則「介之推火封妬婦」)、青州府臨朐縣(第四則「藩伯子散宅興家」)。山西では太原府綿縣(第一則「介之推火封妬婦」)。河南では開封府(第九則「漁陽道劉健兒試馬」)、懷慶府河内縣(第六則「大和尚假意超昇」)、河南府洛陽縣(第十一則「黨都司死梟生首」)、信陽州(第六則「大和尚假意超昇」)。湖廣では德安府應山縣(第六則「大和尚假意超昇」)、荊州府江陵縣、黄州(府)麻城(縣)(ともに第五則「小乞兒眞心孝義」)。陝西では延安府安塞縣、延安府清澗縣(ともに第十一則「黨都司死梟生首」)。南直隷では徽州府績溪縣樂義鄉(第三則「朝奉郎揮金倡覇」)、蘇州城北寺(第八則「空青石蔚子開盲」)、蘇州半塘(第十則「虎丘山賈清客聯盟」)である。

以上のうち、第一則「介之推火封妬婦」の太原府の綿縣が実在しない縣であるほかは、すべて実在の地名であり、地理的な関係にも矛盾はないようである。第六則「大和尚假意超昇」の德安府應山縣は、文中に河南信陽州と界を接するとあるとおりである(同じ話に恨這關と書かれている場所は地図上では杏遮關となっているが、おそらく表記上の問題にすぎないであろう)。『豆棚閒話』の物語の舞台となっている地方は、すべてが作者熟知の場所とまで言わずとも、王夢吉が遊歴した範囲にほぼおさまっている。

第九則は作者の北京寄寓および華北遊歴の経験と直接関係していると思われる。正確な年数は分からないが、王夢吉が天啓年間から崇禎年間にかけて北京の獄中にあった王化貞の身辺にあったことは事実であるから、第九則において、語り手が「わたくしは京師に数年間住んだことがありまして」云々と語っているのを、作者の経歴と関連づけて考えることは容認されるであろう。この語り手は、誰と特定されないまま語り出し、最後まで姿を見せないために、作者自身が直に語っているような印象をあたえる。語り手は、つづけて自分で見たという錦衣衛・東廠や五城兵馬司の内情について述べ、そのなかで密偵(番子)から聞いたという犯人検挙のカラクリを紹介している。それによれば、京城で犯人が期限内にちゃんと検挙されるのは、普段からのらくら者たちをたくさん飼い慣らしておいて、必要に応じてそのなかから選んで犯人に仕立て上げるというのである。このあたりは作者の北京時代の体験に裏打ちされていると思われる。作者が久しく獄中の王化貞の身辺にあったことは、このような社会と接触することを可能ならしめた、あるいは必要ならしめたはずだからである。

五

次に、『豆棚閒話』の作者が、滅んだ明朝および明清交替に対してどのような態度をとっているかを見てみよう。

もっとも、自らの立脚点を明示しない、というより固定しないのが、『豆棚閒話』の作者の策略である。語り手が入れ替わりながらそれぞれの物語を語るという構成がそれを可能にしている。各則の物語の内部においても、相反する視点が設定されている。それだけに読者が読み方を誤る危険は大きい。紫髯狂客が述べるように、作者の本意は深くかくされていて、読者は「善読」を求められているのである。第十二則はその代表例である。中心的な語り手は城内から来た学監(齋長)で、これが滔々と儒家の正論をまくし立て、仏・道二家を完膚なきまで攻撃して見せる。第十二則の紙幅はほとんどがこの学監の長広舌によって占められるので、読者は作者が自らの立場を開陳したかと思いかねない。しかし結末におい

て、天下の事は多くがこのような「迂僻の論」によって損壊されるのだと評されることによって、この学監は作者から引き離される。ところが、回末の評において、評者はこの学監の言を作者艾納の言として称揚するので、豆棚の語りの世界が収束したあとも、学監の正論は完全に否定されないまま残る。

第十一則「黨都司死梟生首」は、崇禎年間の流賊の猖獗を背景とした話で、ひとりの老人(訓蒙教授すなわち子ども相手の塾教師ということになっている)が往時の「戦火と乱離の苦しみ」を語る。なかに、万暦末年から崇禎初年、流賊の跋扈が始まるまでの流れを要約した箇所があり、作者のこの時代に対する見方の一端を述べたものと思われる。

語り手によれば――万暦四十八年に遼東の変が起こり、泰昌の世が一月でおわった。かわって即位した天啓帝はまだ年が若くぼんやりして、世の中のことがすこしもわかっていなかった。天下に兵を募り軍費を徴したが、魏太監(魏忠賢)に内帑をすっからかんにされた。その頃の騒ぎはまだ山海關の外でのことで、内地はまだ静かであった。ところが崇禎皇帝にかわると、彼の運気は天啓よりもさらにわるかった。連年の旱魃か、でなければ大洪水、疫病の流行か、でなければイナゴの異常発生という具合。おまけに生来のケチで、世務に通じない科道官が上意に迎合しようと、上奏して天下の駅逓夫馬銭糧をことごとく撤廃したために、例の無職無頼の連中が衣食のみちを絶たれ、徒党を組んで掠奪をはたらくことになった、云々。ここには、前朝に対する眷恋のかけらもない。明朝は滅ぶべくして滅んだのである。おそらくそれが作者のいつわりのない実感であろう。

新朝にどのような態度をとるかという忠節ないし出処の問題は、王朝交替直後の士人の最大の関心事であった。士人の間に反清感情が深く鬱積していたと見える江南において、しかし王夢吉の態度はそれと同じではない。第七則「首陽山叔齊變節」がこの問題を取り扱っている。この則については、「漢奸心理」を描いたとか(趙景深『中國小説叢考』)、「千載にわたって人格を仰がれ、孤高で廉直な」叔齊が「新朝にしゃしゃり出る無恥の徒」になったとか解説されている(江蘇古籍出版社『西湖佳話等三種』所収『豆棚閒話』「前言」。筆者は張道勤氏)。確かに叔齊の「変節」を指弾しているかに見えるが、

作者の本意はおそらくそこにはない。前朝への節義にしがみついて餓死する兄の伯夷もまた語り手から冷笑の的にされているからである。

王朝交替に対する態度と関連するが、遼東に向ける作者の眼差しも、江南の一般読書人のそれと異質なものがあると思われる。第十一則において、明末の重大事件に触れながら、王化貞が関わった廣寧失陥のことを記さないのは、作者の閲歴からすれば、敢えて回避したのだと考えられる。作者の遼東問題に対する関心のもちかたを見る上で、第四則「藩伯子散宅興家」はさらに重要である。物語の舞台は関内、山東に設定されている。主人公の闇公子が困窮した一人の読書人を救い、自分が零落してしまったのを助けられて家を再興する。ところが兵馬に蹂躙されて山東六府が荒野となってしまう。そのときに闇公子の邸宅を守ったのは、かつて公子の家を掠奪して失敗、捕えられたのを不問にしてもらったばかりか、公子から紹介状をもらって遼陽鐵嶺總兵李如松のもとに投じた趙完璧である。趙完璧は崇禎年間に実在したが、作中人物がこれと関係があるかどうかはわからない。李如松は実在の人物である。万暦年間に遼東に一大勢力をきずいた李成梁の長子で、父の寧遠伯を襲爵した。李成梁は清太祖ヌルハチと関係が深く、ヌルハチが満州の覇権をにぎるにあたって、その後ろ盾となったとされる。

関外から乗りこんで混乱を治めるのはひとりの趙完璧であるが、その背後には鐵嶺の李家が存在する。作者にとって、遼東は必ずしも中国の災禍の源というばかりではないようである。

遼東の「梟雄」毛文龍を作者がどう見ていたかは、作者王夢吉が王化貞の門客であった事実からしても、興味のもたれるところである。崇禎二年(一六二九)六月の袁崇煥による毛文龍謀殺は、遼東情勢を大きく転換させた事件であるが、第十一則でこの事件に言及している。語り手である老人は言う、「ところが国運がゆきづまりそうになって、一個の袁崇煥を用いて遼東を経略させた。(袁は)まず朝廷で大口をたたいて、五年内に成功を上奏すると言って、あの勳臣の官邸に住んだ。のちに始末をつけられなくなり、計をめぐらしてまず東江の毛帥を殺した」。

文中、毛帥と呼ばれているのが毛文龍（一五七六～一六二九）である。杭州府銭塘（仁和とも）の人。幼くして父を喪った。丹陽の諸葛雲程の知遇を得て遼東巡撫王化貞に推薦され、その下で遊撃となったとも（『石匱書後集』巻十）、舅父の沈光祚の薦で遼東總兵李成梁のもとで内丁千總となり、のちにやはり沈光祚の薦で王化貞にあい、練兵遊撃に補せられたともいう（『明季北略』巻二）。いずれにしても、遼東巡撫王化貞によって抜擢されたことがその後の雄飛のきっかけであった。崇禎二年、袁崇煥に謀殺された。

右の引用につづけて、老人は、袁崇煥が毛文龍を謀殺したために、陝西に馬の調達に出向いていた毛文龍配下の兵丁が行き場を失って反乱を起こし、あわせて飢民が雲集して流賊となったと語る。

袁崇煥が毛文龍を謀殺した事件については、評価が大きく分かれた。事件後、毛文龍の冤を鳴らす声がある一方で、袁崇煥の壮挙に快哉を叫ぶ向きもあった。ところが、事件の数か月後に早くも清軍が長城を破って京師に迫るという事態になったために、袁崇煥は通敵を疑われ、翌年八月、磔刑にされた。概して杭州一帯では毛文龍に対する同情が強かったと考えられる。毛先舒に「毛太保公傳」（思古堂十四種書『小匡文鈔』）があり、毛奇齢に「毛總戎墓誌銘」（『西河合集』）がある。張岱『石匱書後集』は毛文龍に同情的で袁崇煥に批判的である。時事小説では平原孤憤生（陸人龍）『遼海丹忠録』（崇禎三年刊）が毛文龍の側に立ってその一生を描いている。王夢吉の場合は、同郷人ということのほかに、王化貞との関係からしても毛文龍の死を惜しむ気持ちが強かったのは当然であろう。さらに言えば、第三則「朝奉郎揮金倡覇」の海東天子劉琮の描き方に見られるような、一種の英雄崇拝も考え合わせるべきであろう。

第十一則は、遼事を語るというよりも、それとならんで明末の重大問題であった流賊の猖獗を背景とした話で、作者自身の体験がなにほどか取り入れられている可能性はある。第一の物語の旅人は陝西、河南をまわって湖廣にもどった際、流賊の危害によって四肢、顔貌を損なわれた多くの人を見かけたとしている。流賊の猖獗は崇禎年間全体を通じてのことであるから、作者の見聞は当然これに及んだであろう。

しかしながら、なかに語られる二つの物語は、作者の遊歴体験に根ざしたものとは、とうてい思えない。旅人の目撃談として語られる第一の話は『廣異記』や『萍洲可談』に見える古い話（李翊『戒庵老人漫筆』巻六「無首猶生」）の焼き直しである。作者の体験とはまず関係していそうもない。なかにあげる三十七名の流賊の頭目名も同様である。語り手は、流賊の分派のことは忘れたが頭目の名前と綽名はわかるとして、三十七名の頭目について実名と綽名であげている。しかしそれは、活動時期の異なる頭目や実在の疑われる頭目たちの名を雑然と並べたものにすぎない。いま呉偉業『綏寇紀略』、彭孫貽『流寇志』などの流賊史料や、流賊の名号を研究した王綱氏の『明末農民軍名號攷』などと照らし合わせてみると、本名、綽名とも一致するのは、闖将（李自成）、曹操（羅汝才）、八大王（張獻忠）、李公子（李巖）の四名のみである。他の三十三名は本名と綽名が一致しないか、記録に見えないかである（注11）。なお、李巖が実在の人物でないことについては欒星氏らに研究がある（注12）。

作品全体として言えば、作者が拠って立っているのは、要するに反士大夫の立場である。遺民的な生き方に対して同情的でなく、冷笑的であるのはその一つの側面である。ハナン氏も説くように、『豆棚閒話』の作者に前朝へのこだわりはない。題材から見ても、明末の〈三言二拍〉や李漁の作品のように、読書人の生活や科挙を正面から取り上げることはない。士大夫の子弟を主人公にするにしても、士大夫社会から脱落、逸脱した者を取り上げる。第四則「藩伯子散宅興家」の閻顯や第九則「漁陽道劉健兒試馬」の「敗家子」劉豹がそうである。士大夫的価値に対する否定的な態度は、第五則「小乞兒真心孝義」に見られるように一種の野生志向としても現れる（この第五則は第九則同様、姿を見せない語り手によって語られている）。

作者の関心が遊俠的な世界に傾斜している点も（第九則「漁陽道劉健兒試馬」）、士大夫的価値に対する否定を物語る。これは同じ作者による『麴頭陀傳』にもはっきりと現れている傾向である。濟顛小説は後に義俠小説の色彩をつよめるが、その転換のきっかけとなったのが、王夢吉の『麴頭陀傳』であったと考えられる。王夢吉は市井の生活を描かない。義

侠小説『水滸傳』がそうであるように、『豆棚閒話』の作者も、いわゆる「児女の情」といったものには概して冷淡である(第二則「范少泊水葬西施」)。第三則「朝奉郎揮金倡覇」に描く蘇州の質屋にやってくる市民たちの生態も、主人公がこれから入っていこうとしている大きな世界のための序幕にすぎない。作者の眼は、いわば非日常の物語に向けられている。『豆棚閒話』という作品が明末の動乱の体験から出てきたものであることはまぎれもないが、作者は体験の記録とは対極にあるものを追求している。「乱離の世の奇事」がそれである。

むすび

『豆棚閒話』および『麴頭陀傳』の作者王夢吉について、略伝風に記せば次のようになるであろう。王夢吉、字は齢長。艾衲居士、香嬰居士などと号した。杭州府錢塘の人。生卒年は未詳。万暦二十年代の生まれか。明末に北京に寄寓し、遼東巡撫王化貞の門客であった。その『普門醫品』をあたえられ、北京を離れて山西、陝西、湖北、湖南などの地を遊歴したことがある。この間、売薬を生業としていた形跡もある。五十歳ちかくまで子がなかったために薬王に願をかけて施薬を誓ったところ、つづく十余年に三子を挙げた。入清後に短篇小説集『豆棚閒話』を刊行し、康熙七年に長篇小説『麴頭陀傳』を、翌八年に『普門醫品』をもとにした実用医書『行笈験方』八巻を刊行した。少なくともこの年までは生存した。次男は王永譽(字は集生)といい、弟に王漋(字は泚藥)、姪(おい)に王應宸(字は道含)がいた。杭州で名を知られた医師呉嗣昌(字は懋先)らと交遊があった。

知られる伝記事実は多くはないが、これが糸口となってさらに新たな事実が発見されることを期待したい。

明末清初という時代は職業作家というものが一応成立していた。しかしながら、小説作者の文筆活動は小説のみに限られていたわけではなく、個々の作者を考えるときに、彼が他の分野でもその筆力を発揮していた可能性を常に想定しなければならない。また、この時代といえども、小説の作者は職業作家に限られていたわけではなく、名の通った歴とした士大夫が覆面作家となっている例も考えられる。さらに、小説は言論の一つの形体として大小の社会事件と関わりをもつことも往々にしてあったから、その方面から作者解明の手がかりが得られないとも限らない。

『豆棚閒話』の場合、作品自体から得られる情報によって作者像をさぐる従来の試みは、ある程度成功している場合もあれば、完全に失敗している場合もある。ある明史専門家は、第十則「虎丘山賈清客聯盟」から見て、蘇州の世俗人情を熟知していること、蘇州、常熟の方言を使用していることを根拠として、作者を蘇州、常熟一帯の人としたが、これは失敗した例である。一方、「叙」の文言から、作者は民間で医業によって生計をたてながら、一方で詩文小説の創作に従事したと、かなり正確に推定した前述の張道勤氏のような例もある。

作者問題を考えるにあたって、作品自体が内包する情報を綿密に吟味することの意義を否定するものでは、もとよりない。しかしながら、それが全てでないことは、これまた言うまでもない。一般に明清小説関係の資料は一応整備され、いわゆる小説史の資料に限定するなら、作者問題を含めて、たいていのことは調べつくされていると言ってよいであろう。それでも多くの作品が作者未詳のままになっている。小説史というせまい枠内の資料のみの研究では、問題の解決は大して期待できないのであって、少なくとも明末清初の小説作品については、小説史の周辺およびその外部に存在する資料にも目を向けなければならない。

【注】

(1) Patrick Hanan "The Chinese Vernacular Story" (Harvard University Press,1981)　※漢訳に韓南著、尹慧珉譯『中國白話小説史』(浙江古籍出版社、一九八九)がある。

(2)徐志平『清初前期話本小説之研究』(臺灣學生書局、一九九八)。

(3)字を誤るのみならず、名の方も「王孟吉」(『中國古代小説百科全書』「醉菩提全傳」の項)、「王楚吉」(『中國通俗小説總目提要』「濟公全傳」の項、人民文學社版『醉菩提傳・麴頭陀傳』校點後記)などの誤記がつづいている。

(4)談遷『棗林雜俎』智集。

(5)『今樂府』。岡本さえ『清代禁書の研究』(東京大学出版会、一九九六)第二部第三章に言及がある。

(6)その詩に云う、「昨者簿録大名門、千人萬人垂啼痕。人人願以長生報、手額祝天天不言」。

(7)李光濤『熊廷弼與遼東』(中央研究院歷史語言研究所、一九七六)。

(8)序末に「崇禎改元冬至日、瑯琊王化貞書于請室」とある。康熙重刻本の「自序」では、この部分が削除されている。

(9)小説『跨天虹』の残本が伝わり(苗深等校點『明清稀見小説叢刊』に排印。齊魯書社、一九九六)、これに「聖水艾衲老人漫訂」として艾衲の名をあげるので、王夢吉がこの作品と何らかの関係があることは否定できないが、実質的な関わりがどうであったかについては、なお検討を要する。

(10)江蘇古籍出版社『西湖佳話等三種』所収『豆棚閒話』「前言」。

(11)王綱『明末農民軍名號攷』(四川省社會科學出版社、一九八四)と照合した場合で言えば、三十七名のうち、次の綽名が王氏の書物に見えない。没遮攔、平世王、革天王、劉國龍、活閻羅、一秤金、虎拉海、賽金剛、鬼子母、金翅鳥、金錢豹、莽張飛、鄧天王、閻王鼻、雲裡虎、三猴兒、老當家。

(12)欒星『李巖之謎―甲申史商』(中州古籍出版社、一九八六。増補版『甲申史商』一九九七)。